

実践報告

専門職大学院における「ディベート的討議演習」(その1) —— インナースピーチとペアトークの教育的有効性とその実際 ——

花田 修一

本稿は、平成 18 年度の本大学院「ディベート的討議演習」(通年)の授業内容を中心に記述したものである。本授業では、次のような演習を行った。①インナースピーチ、②ペアトーク、③グループディスカッション、④ロールプレー、⑤ディベート、⑥パネルディスカッション、⑦シンポジウム、⑧会議。本稿では、①と②の実践を中心に報告する。受講者は、11 名(国語科 9 名、理科 1 名、英語科 1 名)である。

インナースピーチ(inner speech)は、一般的には「外言」(他人への言語)に対して「内言」(自分への言語)と訳されている。筆者は、このインナースピーチを「自己内対話」と訳し、学校教育における「ディベート的討議演習」の方法論の一つに位置づけた。

ペアトーク(pair talk)は、一般的には「二人での話し合い」「対話」「対談」などと訳されている。筆者は、このペアトークを「二人対話」と訳し、学校教育における「ディベート的討議演習」の方法論の一つに位置づけた。

インナースピーチもペアトークも、ある課題や論題に対してその内容的価値について「自己内対話」や「二人対話」を繰り返すことによって、自己及び他者の考えや認識を深めたり、広げたり、変革したりすることを意図するものである。

以下、講義用ノートや受講者の発表資料などを基にして実践報告をし、その教育的有効性を明らかにし、教職専門職大学院教育における「ディベート教育」の実践的研究開発の一助としたい。

キーワード： 立場の転換、論理的思考力、認識の深化・拡充・変革、表出の方法

I 本授業の概要

1 本授業の構想

本授業の目的

本授業は、本大学院を卒業後、中学校及び高等学校の教師をめざす人を対象として開講したものである。本授業では、優れた教師になるための「ディベート的討議法」の基本的・応用的な実践的指導能力を一層高め、自らの人間的素養や資質をさらに高めること、また、討議法の歴史や理論や

実践などに学び、中学生及び高校生に対して様々な問題を発見し解決する力を身につけさせ変化する社会に対応できるように、受講者自らの指導力や授業力を高めることを目的としたものである。

本授業の方法と計画

前期は、「はじめに」で示した①～⑧の様々な「ディベート的討議法」の理論的・歴史的・実践的経緯を受講者各自が分担して調べ、考察し、報告するという方法をとった。その報告に対して、受講者同士が質疑応答や討議を繰り返し、必要に応じて授業担当の筆者が指導・助言を行った。

後期は、前期で学んだ内容をふまえ、受講者全員が様々な「ディベート的討議法」の演習（模擬授業）を実施し、討議を通して、実践的教育方法の有効な開発を行った。

本授業の評価

本授業における、評価は、出席率（30 パーセント・講義ノートの記入と毎時間の自己評価・反省）、レポート（20 パーセント・夏季及び冬季休暇中の課題）、模擬授業と討議への参加（30 パーセント）、定期試験（20 パーセント・前期及び後期の筆記試験）などを総合的に判断し評価した。なお、この成績評価については、最初の授業で受講者に明示した。

2 「ディベート的討議法」に関する受講者の実態

最初の授業で、「ディベート的討議法」に関する経験を受講者に問うたところ、次のような反応があった。大学生では、「捕鯨の是非」（パネルディスカッション）、「煙草の功罪」（グループディスカッション）、「校則は必要か」（話し合い）、教育実習での「小説（夏の葬列）」（ディベート）。高校生では、「なぜ人を殺してはいけないか」（クラス討議）、「光は粒子か波か」（物理の時間の話し合い）、「米の輸入自由化」（話し合い）。中学生では、「捕鯨の是非」（ディベート）、「米の輸入自由化」（話し合い）などであった。

なお、未経験者は2名。「ディベートは苦手だ」が1名、「会議は苦痛だ」が1名いた。

このような受講者の実態をふまえ、筆者は、「ディベート的討議法」の意義について受講者に次のよう述べた。

「学校における学習は、他者との認識の違いを知り、自己認識を深めたり、広げたりする『学び合い』がなくてはならない。学校にまで来てなぜ学び合うのかを実感し、体験できるような授業を創出し、学習者が問題や課題を『共有』できるようにする工夫が必要だ。教師は、常にアンテナを張って世の中の動きを捉え、学習者の『知的好奇心』を喚起し、刺激を与える授業を創り出すことだ。中学生や高校生は、授業方法のマンネリ化を最も嫌う。したがって、ディベートなどの授業を活性化する方法に挑戦し、教師自身がワクワク・ドキドキするような授業を創り出すことだ。ディベートの授業は、その論題によって成否が決まる。人を非難するのではなく、論理の展開や根拠の挙げ方などその内容を批判するのだ。

このような筆者の話を聞いて、受講生は、次のような反応を示した（注1）。「私は、ディベートの経験がない。その方法論などをしっかりと勉強しようと思う。自分の考えを人に伝えるのが苦

手な私は、特に努力をしないといけないと思った。」「ディベートなどの知識や技法を学んでいきたい」「特に、言語力や思考力や指導力を身につけたい」「おもしろい授業になりそうだ。オリジナルなディベートの論題を考えたい。」「授業法のマンネリ化を防ぎたい。」「英語の授業でディベートを試みたい。」などである。

これらの反応や感想から、筆者は、受講者の「ディベート的討議法」の授業に寄せる興味・関心・意欲を喚起することができたと考えた。そのことは、また筆者自身の授業への意欲を掻き立ててくれるものでもあった。授業は、常に「学習者」と「指導者」の問題意識に対する「対話」と「共有」によって生産的に創出されていくことを実感できた最初の授業でもあった。

3 学校における「ディベート的討議法」の教育的意義

学校教育において「ディベート的討議法」がなぜ有効なのか。その教育的意義はどこにあるのか。筆者は、次のように考えている。

ある問題や課題を解決しようとするとき、人は話し合いを必要とする。限られた時間と空間の中で民主的な手続きを経て様々な問題や課題を解決していく力、それが人間の知恵である。そしてその知恵は、生涯にわたって必要な生きる力でもある。その基盤となる力を中学生や高校生に身につけさせたい。話し合いには、相互に人間尊重の精神が大切である。尊重するがゆえに議論をするのだ。そうして、豊かな人間関係をも構築していくのだ。話し合いは、広義には、対話・会話・会議・討論・討議などの音声による言語活動をいう。狭義には、対話・会話と討論・討議の中間に位置づける。会議は、討論・討議よりもやや自由な話し合いということになる。

これからの教育では、「ディベート的討議法」がますます必要となってくる。国際化や情報化の時代の中で、自分の考えや意見を的確に伝える力、他者の考えや意見を的確に聞き取る力、さらには、討議を通して様々な考えの共通点や相違点を明らかにしつつ、新しい考えや意見を生産し創出していく力、それらの能力や資質が求められている。

上記の考えをふまえ、私は、次のように受講者にも話した。

「ディベート的討議法」の演習を通して、問題や論題について様々な立場で考えてみることで、論理的な思考力を養うこと、自己の認識の深化や拡充を図ること、目的や相手や場面に応じた適切な言語表現力などを身につけていこう。

この第2限の授業を終えて、受講者は次のように述べた。

人は対話しながら生きていくものだと思えて感じた。また、学びに新鮮さが必要だと思った。同じ教材を使っても、目標（ねらい）が明確であれば方法（教え方）はいろいろとあるということがよく理解できた。驚きと納得の授業であった。

Ⅱ 「インナースピーチ」の教育的有効性とその実際

1 「インナースピーチ」の教育的有効性

「インナースピーチ」が、なぜ、学校教育にとって必要なのか。それは、ある課題や論題に対して、その内容的価値について「自己内対話」を繰り返すことにより、自己の考えや認識をさらに深め、広めることができるという教育的有効性が認められるからにほかならない。青年前期における中学生や高校生は、その精神発達から自己の考えや認識が偏見と独断に陥りやすいという傾向がある。それはまた、その時期における特徴でもある。その彼らが、現在の自己の考えに相反するあるいは対立する「もう一つの考えや立場」を考え出すということで、彼らの思考や認識は一層深化し拡充していくものである。つまり、視点や立場の転換を図った「自己内対話」を繰り返すことで、そこに「論理的思考」や「認識の深化・拡充・変革」をも育むことが可能であると考えられる。

2 「インナースピーチ」に関する諸説

「インナースピーチ」に関する教育的意義やその有効性については、これまでも心理学や教育学などでも紹介され、学校教育における実践も行われている（注2）。また、いわゆる「内言」について、ヴィゴツキー（Vygotsky, L.S.）が「児童の思考過程に言語が参与している」という実験結果を得て、「外言」と「内言」という概念を創出した（注3）。この「内言」と「外言」について、井上尚美は、次のように解説している（注4）。

簡単な思考なら頭の中にイメージを思い浮かべるだけで可能であるが、複雑な、難しいことを考えようとするときには、心の中で言葉を発して自己内対話（完全な文の形でなく、断片的・非文法的なものである場合が多い）を交わしながら考えを進めていくのである。この心内語を「内言」(inner speech) と呼ぶ。これに対して実際に外に向かって音声化された言葉を「外言」という。

また、戸田雅美は、森岡健二の研究を引用して次のように紹介している（注5）。

外語（外言）はコミュニケーションの用具としての言語であるから、その教育、すなわち外語教育は、実生活上のさまざまなコミュニケーションの体験によって行われる。（略）それに対して内語（内言）は頭の中の記号活動であり、いわば思考の用具であるので、実生活の場で自然にその発達を待つよりは、意図的・計画的あるいは体系的に教育することが望ましいとしている。

これらの諸説は、教育的にも妥当な考え方であり、いずれも人間の発達段階をふまえた児童対象の実験や研究の成果などをふまえた提唱であるが、中学生や高校生の指導に当たっても十分に活用できるものだと、筆者の経験知からも判断しているところである。

3 「インナースピーチ」の授業の実際

(1) 「インナースピーチ」の定義と教育的意義についての発表と考察

「インナースピーチ」については、AとBの二人の受講生が担当し、資料などを検索し、発表した。

以下、その一部を紹介し、その発表内容と方法について考察したい。

① 「インナースピーチ」の定義

AとBは、先行定義を紹介しつつ、「インナースピーチ」を次のように定義した。

ある課題に直面したときに、すぐに応答するのではなく、「待てよ」と一時言動を中断し、様々なことを自分の頭の中で考えたり、調整したり、調査するなどして最適の応答を選択することである。

この定義を導き出すために、AとBは、(注6)と(注7)に示した二人の先行定義を引用し、その一部を次のように紹介した。

・ 井上尚美の定義(注6)

外からの新しい情報を、個体が既に持っている情報構造の中に取り入れて同化したり、また変換操作によって既成の情報構造を変化させたりするような個体内部のはたらきである。

・ 河野順子の定義(注7)

自己内対話とは、自分の中に自分の思考や振る舞いを客観視するもう一人の自分が生まれ、その視点から自己を振り返るような対話である。つまり、自分と自分の中の他者による対話のことである。

AとBの「インナースピーチ」の定義に筆者は賛同した。そして、「定義はあくまでも仮説である」という意味のことを付け加えた。なぜなら、教育における様々な定義は、実践をふまえて時代とともに変容していくからにほかならない。

② 「インナースピーチ」の教育的意義

AとBは、「インナースピーチ」の教育的意義について、次のように発表した。

自己内対話は、「説明する行為」に大きな影響を与える。説明するためには、その根拠を述べねばならない。自分の考えの根拠が、たとえば自分の過去の体験・経験からくるものなのか、すでに手に入れた知識からくるものなのか、他者とのやりとりの中でつくられたものなのか、自分の思考過程を他者の視点から吟味する。これにより、「説明する行為」がより確かなものとなり、「話す力・聞く力」も育成される。

このように、「インナースピーチ」は、生徒達に、思考力をつけ、意欲的に問題を解決できる能力を育成することが可能である。そのために、問題が発生する→自分なりに見当をつける→持っている知識や体験を思い起こす→情報が不足のときは調べる→さらに考えて判断する、といったところに「インナースピーチ」の教育的意義を見い出すものである。

AとBの「インナースピーチ」の教育的意義の考え方に筆者は賛同した。AとBは、先行論文に学びつつも、これまでのそれぞれの既存の知識や経験をふまえ、自分達なりの考えをまとめて、教育的意義について述べようとした。この行為こそが、まさに「インナースピーチ」の原点にほかならない。他者に学ぶという経験を通して、自己の思考や認識を深化し、拡充していくものである。

(2) 「インナースピーチ」の授業の展開

次に示すのは、AとBとが協力して「インナースピーチ」の模擬授業をしたときの資料の一部である。寺山修司の詩を材料として活用し、価値判断を問うものであった。

ディベート的討議演習

A B
2006年6月26日(月) ■■■・■■■
ディベート的討議演習 資料I

『何にでも値段をつける古道具屋のおじさんの詩』 てらやましゅうじ
寺山修司

ぼくは訊ねる
——ロバとピアノは
どっちが高い？

おじさんは答える
——ピアノだよ

じゃあピアノと詩集は
どっちが高い？

ものにもよるけど
詩集が高いことだってあるさ

じゃあ詩集と春とは
どっちが高い？

春だよ もちろん
季節は 超高級品だから

じゃあ春と愛とは
どっちが高い？

愛だろう
めったに 売りに出ないけど

そこでぼくは最後に訊ねる
ぼくの一ばん知りたい質問

——愛となみだは
どっちが高い？

断の「理由」を考えさせるところに、この「インナースピーチ」を取り入れる教育的意義がある。立場を変換させることによって、多様な認識法が身につく、論理的な思考力を育てることにもなる。「愛と涙」については、受講者が半数ずつに分かれて話し合ったのも筆者には興味深いものがあった。

また、次に紹介するのは、受講者Cが模擬授業をしたときの資料（ワークシート）の一部である。

9. 資料（ワークシート）

<インナースピーチ> 氏名（ ）

※ 次の設問に対して、自己を振り返りながら、正直に答えて下さい。

<設問>

1. あなたの長所、短所を述べて下さい。（最も顕著なものを1つ。理由付きで）
（長所）

○

理由（～だから、～だと思う。等）

（短所）

○

理由（～だから、～だと思う。等）

2. あなたの理想の異性像を述べて下さい。（外見、性格、異性に求めるものを書く）
（できるだけ具体的に）

3. あなたは学校や学級、友人や部活仲間、家族、地域に対して、何が出来ますか。
または、どんな形で貢献することが出来ますか。述べて下さい。（対象を1つ選択する）

（〇〇に対し、～ができる。～をしてあげたい。～してきた。～しようと思う。等）

この設問は三つある。「自分の長所と短所(最も顕著なものを一つ挙げて理由も書く)」「理想の異性像(外見、性格、異性に求めるもの)」「学校や学級、友人や部活仲間、家族、地域に対して貢献できること(対象を一つに絞って)」である。これらの「インナースピーチ」は、学級活動やホームルーム活動や道徳や部活動のミーティングなどで活用できるものである。「自己を振り返りながら正直に答える」という方法は、中学生や高校生にとって意義のある学習活動である。自己を客観的に見つめる力、そこから生まれる自省の心、これからの生き方などを考えさせるうえで有効な方法でもある。さらに、次項で述べる「ペアートーク」やグループや学級や部活仲間ととの話し合いなどと連動させることによってその効果は増す。様々な立場の存在に気づき、自己認識の深化・拡充・変革にも寄与していくものである。

4 「インナースピーチ」の授業の考察

以上、「インナースピーチ」の教育的有効性、諸説、授業の実際などについて述べてきた。以下、「インナースピーチ」の授業の考察をしたい。模擬授業には、A・B・Cの受講生が挑戦した。三人ともが初めての経験であった。授業を終えて、三人は次のように述べた。

- ・ 模擬授業は、Bさんとみなさんのお陰で楽しくやれた。曖昧だった「インナースピーチ」の方法が少しだけ分かったような気がする。
- ・ ネタを考えるのに苦労したが、教科書教材の大切さを再認識することができた。考えることがめんどくさいという生徒達には、この「インナースピーチ」は最適である。
- ・ 「理想の異性像」は、「インナースピーチ」だけにとどめておきたいテーマであった。

この「インナースピーチ」の授業を通して、受講者は、「話題や論題の選択法」「校種や学年にふさわしい学習教材の選択法」「先行文献や実践研究に学ぶことの大切さ」「自覚的授業経験の蓄積」などについて認識を深めた。また、筆者は、「インナースピーチ」授業の必要性和教育的意義や有効性についてまとめとして次のように話した(注8)。

人に「伝えたい」という思いや表出したいという衝動が沸き起こってくると、自然と「言葉」が発せられようとするものである。学習においては、この過程を大切にしたい。「心」即「言葉」では「考える」時間がない。目的や相手や場面や状況に応じて、その「考える」過程を学習中に十分に設定したい。つまり、「自己内対話」をする時間をとるということである。たとえば、「学校に携帯電話を持ってくるでもいいではないか」というという考えを主張しようとするとき、「持ってきた場合の功罪」「現状のまま持ってこない場合の長短」などを自分の頭で考えさせ、メモさせてみるのである。賛否両論、あるいは、その中間的な考え(必要や条件に応じて持ってくる)などを、自己内対話させるのである。学習者の発達段階や実態などをふまえ、可能な限り、自己と自己の中の他者との対話をさせるのである。こうして、自分の「心」の中にある携帯電話に対する思いや考えを、内なる言語(内言)から外なる言語(外言)へと導く。「心」を「言葉」で創り出し、紡ぎ出していく過程で、より確かに、より豊かに、より論理的に、より説得力のある

「思考力」や「表現力」が学習者に身についていくのである。

Ⅲ 「ペアートーク」の教育的有効性とその実際

1 「ペアートーク」の教育的有効性

学校教育になぜ「ペアートーク」が必要なのか。その根源には「汝の隣人を愛せ」という筆者の考え方があるからである。中学生や高校生に限らず、小学生や大学生や会社人にとっても、だれが隣の席に座るかは、ある意味では大問題なのである。学級担任の経験がある教師ならだれもが理解できることである。学級活動やホームルーム活動で最も活性化する時間は、この座席決めである。学級づくりの基本となる座席を学習集団としてどう活用し、組織するか。「ペアートーク」の教育的有効性と必要性は、ここに存在する。

学校教育における学習の意義は、隣席やグループや学級の仲間達と、ともに学び合い、高め合うことにある。一人では学べないことを仲間と一緒に話し合い、考え合い、知恵を出し合いながら新しい知見や学びの文化を創出していくことにあるのだ。

「インナースピーチ」の後に「ペアートーク」を取り入れることで、あるいは「ペアートーク」の後に「インナースピーチ」を取り入れることによって、授業はより活性化する。自己内対話から二人対話へと展開することで、その言語表出（外言）を通して、より「コミュニケーション能力」は高まり、「論理的思考力」や「認識力の深化・拡充」をも育むことができるのである。

なお、「対話」と「対談」の定義については、次の解説が教育的に妥当であるので、参考のために一部引用して紹介しておきたい（注9）。

- ・ 対話…一対一で向かい合って自由に話し合うこと。お互い同士が聞き手になったり話し手になったりして話し合うこと。話し合いの最も基本的・生活的なものであり、話し合い学習は、まず対話の訓練から始めるとよい。対話は相手を尊重することが特に大切であり、社会生活を営むうえできわめて重要である。形式としては、質問と応答、相談、インタビューなどがある。
- ・ 対談…対話の一種であるが、対話と違い、第三者としての聞き手がいるということがいえる。また、対話よりやや改まった話し合いである。あらかじめ決まっているテーマについて、組織的・系統的に話を進めていく。

2 「ペアートーク」の授業の実際

「ペアートーク」の模擬授業を担当した受講者DとEは、まず、先行実践を二例紹介した後、「英語は小学校から必修にすべきか」という論題で、「ペアートーク」を試みた。この模擬授業の特徴は、ペアーが論題に対して賛否の立場で交互に対話するということにあった。次に示すのは、受

講者FとGのペアトークの内容の一部である。

F 国際人としての教養として、早いうちから英語に慣れさせておくのはいいことではないかな。せめて英語で挨拶ができるくらいならいいと思うよ。

G 小学生から英語を教えるとなると教師も大変だし、どうしても受験英語の道へ進みそうな気がする。中学生からでいいのではないのでしょうか。

F なるほど。でも、受験のことなんか考えずに、耳からの英語というか、自然に英語の音声に慣れさせるようにしたらどうかな。

G 英語の音声から慣れさせるというのは、現在も小学校で行っていますよね。でも、それで英語が好きになっている子どもは増えているのですか。

F この前、テレビで見たけど、名前と自己紹介ぐらいできるような実践を京都でやっていたよ。

(ここから立場を変えたペアトークに移る)

G 英語そのものの言語を教えるのではなくて、英語で歌ったり、体で表現したりすると、子ども達も興味を示すのでは……。

F 現在中学一年生でやっているような文法から導入するとよくない。英語よりもまずは母語である日本語を小学生にはしっかりと身につけさせたいね。だって、今、日本語が乱れたり、敬語が正しく使えなかったりする若者が多いと言われているしね。僕もその一人だけど(笑)。

G 小学生時代から様々な言語に触れさせるというのもいいのじゃありませんか。世界には、日本語だけではなく、英語も含め3000種類ぐらいの言語があるということも教えておきたい。

F なるほど。でも、そういう知識は中学生になってからでも遅くはないと思うよ。あなたが言ったように、保護者は、親の立場から必ず受験を意識しているし……。

日本語で考える力をしっかり身につけるほうが、将来、英語を勉強するのに役立つと思うけどな…。

G 異言語は、10歳ぐらいからという研究報告もある。小学校5・6年生ぐらいからなら英語を学習してもいいんじゃないかな。とにかく英語を嫌いにさせないような指導の工夫だけはしたいですね。

このFとGの「ペアトーク」は、まさに「二人対話」のよさが十分に表出されていると言える。自分の立場や考えにのみ固執するのではなく、相手の考えや意見などをふまえて発言しているからである。特に、二人の立場(論題に対する賛否)を転換することによって、コミュニケーション能力は高まり、論題に対する認識の深まりや広がりを確認することができる。

3 「ペアートーク」の授業の考察

実際に「ペアートーク」の模擬授業に挑戦した受講者Dは、次のような感想を述べた。

「ペアートーク」という教育方法は、戦後のアメリカや旧ソビエトなどの大きな影響下にあったことが印象的であった。集団主義教育とグループダイナミックスなどの教育方法は、現在ほとんど聞かれなくなってしまった。集団と個人の教育をどうするかという問題は、学校教育における不変の課題でもある。「ペアートーク」の模擬授業をして、様々な教育方法の問題を考えるに到った。今後の私の課題でもある。

また、同じくこの模擬授業に挑戦した受講者Eは、次のような感想を述べた。

「ペアートーク」は、「道徳」の時間に有効に活用できると思った。「小学校での英語必修化」には、私は反対である。しかし、世の中の流れの中では、避けることのできない動きであろう。英語の必要性は、年々高まってきているが、そのことに対する深い論議はあまり見られない。このような中で、英語科教師はどうすればよいのだろうか。文部科学省などでは、小学校段階の英語は楽しく触れる、いわば導入の部分だけとしているが、学校で取り扱うとすれば、当然「好き嫌い」の差が出てきてしまう。そのためにも「嫌いにさせない授業」を一層考えなければならぬ。生徒が、自分の担当する授業や教科や科目などを好きになってくれたら、それは教師にとって最高の喜びとなるであろう。「ペアートーク」もその方法の一つとして、大いに活用していきたい。

また、この「ペアートーク」の模擬授業に参加した受講者達は、次のような感想を述べた。「論題に対する二つの案があった場合、実際の現場ではうまく処理できるであろうか。」「生徒の思考に揺さぶりをかけるという方法を授業ではどのように活用するのが少し不安である。」「嫌いにさせない授業は難しい。しかし、私は、教師になって定年になるまでは国語が好きと生徒に言わせてみたい。」「論題に対してより具体的な根拠や数値で示す大切さがわかった。広い視野を持てる生徒を育てたい。」「ペアートークは、相手を信頼して話すという姿勢や基本的なコミュニケーション能力が身についていくものだと考えた。」「楽しく学び合うということが、学校教育における生きる力につながる。ペアートークには、相手に対する共感的態度が必要である。」などである。

筆者は、この「ペアートーク」の授業（第4講・平成18年5月15日）で、受講者に対して次のように話した。その要旨を講義ノートから一部引用する。

学校現場では教科書を中心に指導をしているが、「ペアートーク」では、どんな話題や論題や内容で行うかは指導者である教師が決めることである。したがって、事前の深い教材研究が必要となる。「ペアートーク」では、先入観や常識や偏見などを打ち破っていくような課題を明示するのが有効である。そのためには、生徒の思考に揺さぶりをかける。固定化した思考に知的な刺激を与えることだ。そのような「ペアートーク」の授業を創出したい。また、説得力のある表現をするのには二通りある。一つは、事実や根拠を挙げて論理的に相手の理性に訴える方法。もう一つは、心情的に相手の感性に訴えかける方法である。この認知的方法と情意的方法とを生徒に

身につけさせておくといよい。「ペアートーク」を授業などに取り入れるときには、生徒に対して「あなたの隣に座っている人と素直に、謙虚に、立場や考えを大切にしながら、ともに学び合い、高め合うのです。」と、その意義をきちんと伝えることが大切である。生徒を「嫌いにさせない授業」ができればプロフェッショナル教師と言える。これは、「好きにさせる授業」よりも難しい。自覚ある修業が必要である。

IV 本授業の成果と課題

以上、「専門職大学院における『ディベート的討議演習』（その1）ーインナースピーチとペアートークの教育的有効性とその実際」についての実践報告を中心に論述してきた。「まえがき」で述べたように、平成18年度に筆者が担当した「ディベート的討議演習」（通年・全27講）の中から「インナースピーチ」と「ペアートーク」の内容に焦点化して報告した。

次に示すのは、受講者自身の自己評価と課題である。最終講（平成19年1月22日）を終えて一週間以内に、筆者の手に提出した「講義用ノート」の最終ページに受講者が書いたものである。ここには、「一年間の授業で学んだこと及びこれからの実践的課題」を書くようにと、筆者が受講者に明示した。以下、二項目にわけて一部転載する。

1 学生が授業から学んだこと

受講者11名の「授業から学んだこと」を一部引用しつつ考察したい。

ディベート的討議の方法に関しては、「ディベート的討議が、文字通りのディベートだけにとどまらず多岐にわたること、ディベートという場面を大々的に設定しなくても日常の授業で取り入れられることがわかった。」「私は、ディベート的討議そのものについて何も知らなかった。受講当初から様々な形態の活動に学んだり、実践したりして見ることで、授業のポイントが見えてきたように思う。自分自身がディベート的討議を体験し、そのおもしろさを実感できたことが何よりの収穫だった。物事を多角的に捉えるためにも、また生徒の活動を通して授業を活性化させるためにも、ぜひ現場に出てからも取り入れていきたい。」「ディベート的討議方法の種類とその方法、授業での活用の仕方などを学び、現場で積極的に実践できる自信を持つことができた。」などの感想があった。受講者のディベート的討議への知的好奇心やその方法の多様性を喚起することができたことを考察できる。

ディベート的討議の目的に関しては、「役回りによっては、自分の考えと反することを論理的に主張することもあり得る。ここでは、思考の転換と真の論理的思考力が身につくことを経験した。」「相手を納得させるための具体的な根拠や数値の挙げ方を考えることによって、論理的思考力を養うことができた。」「論理的思考と批判的思考の大切さとそれらを養うディベート的討議法が有効であるということを身をもって学ぶことができた。」「ディベート的討議の目的や方法には様々なあ

るが、特に、インナースピーチにおける立場の転換や認識の深化には最適の方法だと思った。私にとっては、素敵な出会いだった。」「物事を画一的に見ないで、視野を広げることができる。視点や立場を変えることが、このディベート的討議法がもつ教育的意義の一つでもある。」などの感想があった。筆者が意図したこのディベート的討議演習のねらいである「立場の転換」「論理的思考力」「認識の深化・拡充・変革」「表出の方法」などを受講者達は、確実に理解したと考察できる。ディベート的討議演習そのものの授業に関しては、「ディベートが学校で重要視されていることは知っていたが、それをどのように授業に生かすかのことは知らなかった。そもそもディベートの経験は皆無であり不安であった。この授業を通して様々なディベート的討議法の手法や活用法が理解できただけでなく、なによりも実際に体験できたことが非常に有意義であり、授業に取り入れる意欲と自信とがついた。」「生徒に学ぶ意欲や方法を教えるのにこのディベート的討議法を学んだことは有意義であった。」「これまで苦手だったディベート的討議法も努力して会得していくようにしなくてはいけない。」など前向きで、意欲的であったと考察できる。

2 学生が授業から発見した実践的研究課題

一年間にわたるこの授業で学んだことを通して、受講者は次のような「実践的課題」を発見した。その一部を引用しつつ考察したい。

「敬語指導のロールプレーでのステップアップ」「ディベートでの肯定側・否定側の互いの主張を一方通行ではなくかみ合った討議とするための論点の絞り方の工夫」「活発なグループディスカッションと盛り上がるディベートの指導法」「生徒とともに論理力を高める方法」「ディベート的手法を使って問題の本質や解決法を工夫する方法」「グループディスカッションやペアトークを取り入れ生徒同士が討論し考えを深めていく場面の設定法」「インナースピーチとラベルワークの融合を図った手引書の作成」「一方的な教授スタイルを破るディベート討議法の応用」など、いずれも「ディベート的討議法を授業にどのように取り入れて活用していくか」というのが多くの実践的課題であった。今後、学校現場に立ったとき、この実践的課題が試行されることを願うばかりである。

おわりに

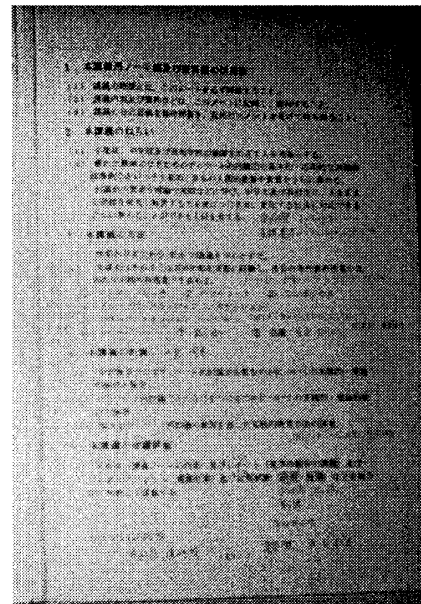
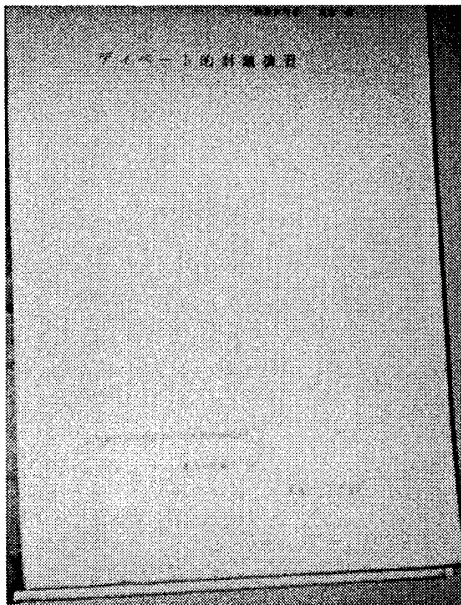
以上、表題に即して、専門職大学院における授業の一端を報告してきた。受講者の自己評価や実践的課題を考察すると、どの学生も「学校教育におけるディベート的討議演習」の内容や方法を学ぶことによって、その教育的意義や有効性を実感していることが判明した。これは、彼らが実際に「模擬授業」という形態を体験したことが大きく影響しているからにはほかならない。ディベート的討議法の理論や歴史や先行実践に学びつつも、自らが新しい教育方法に挑戦しようという意思を持続させ、仲間とともに学び合い、高め合うという貴重な体験が生んだ結果でもある。筆者にとって

も所期の目的はある程度達成されたと自己評価をしている。この授業を通して、筆者は学生達に繰り返し次のように語りかけてきた。「多様な教育方法を身につけること(ディベート的討議法もその一つであること)」「生徒が生き生きと活動できるような授業を工夫すること」「価値があると判断した新しい教育方法に常に挑戦し続けること」「生徒に身につけるべき学力を明確にして授業を展開すること」「生徒同士そして教師もそれぞれの授業を通して学びの文化を創出していくこと」などである。

本稿で報告した事例以外にも「インナースピーチ」と「ペアトーク」の演習もあるが、紙面の都合で割愛した。なお、本紀要『教育総合研究』の第2号では「ロールプレー」を中心に、第3号では「ディベート」を中心に、それぞれの授業の実践報告をする予定である。

(注)

- 1 最初の授業で、下の写真に示した「ディベート的討議演習」と題した手作りの冊子「講義用ノート編及び資料編」(B5判80ページ)を学生に手渡した。それには、毎時間の授業の記録ができるようになっている。内容は、「1 前時の自己評価を基に、問題意識などの共有化を図る(約20分)」「2 本時の主な内容(約60分)」「3 本時の自己評価=本時で学んだ内容や方法に関する新知識・問題意識・感想・意見などを書く(約10分)」という構成になっている。本文中の学生の自己評価は、この欄の「3」に書いた内容の一部である。

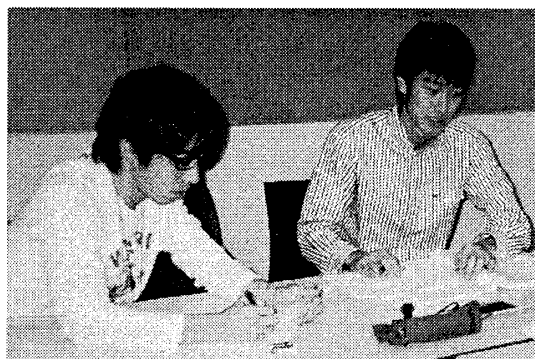
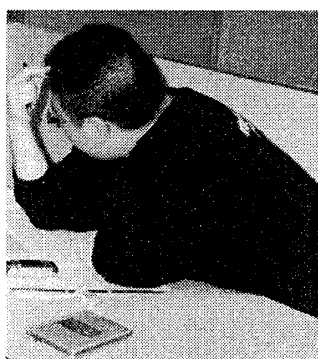


- 2 たとえば、下松市立東陽小学校の「自己内対話を促し、自己を表出させる授業づくり」などの実践研究がある。HP (<http://www17.ocn.ne.jp/~toyosho/ken2.htm>) 参照。
- 3 ヴィゴツキー(柴田義松訳)『言語と思考(上・下)』1962年 明治図書
- 4 井上尚美「認識・思考」「内言と外言」『国語教育指導用語辞典』1984年 教育出版

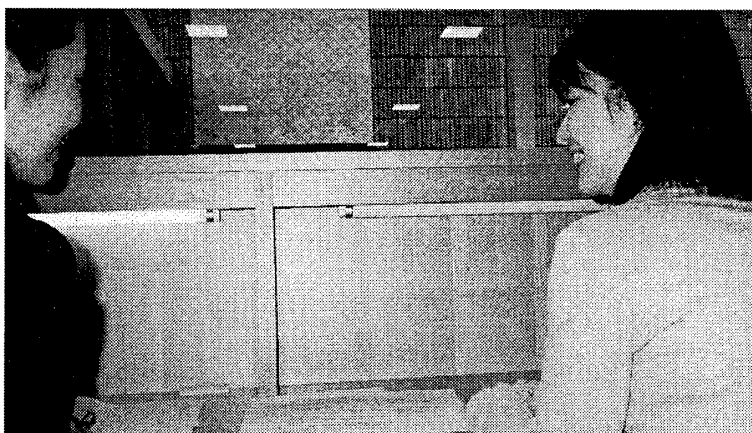
- 5 戸田雅美「内言」『国語教育辞典』2001年 日本国語教育学会編 朝倉書店
- 6 河野順子『月刊国語教育』2005年12月号 東京法令出版
- 7 井上尚美『授業研究』1993年6月号 明治図書
- 8 花田修一『心を育む言葉の教育—いま、国語教育に足りないこと—』2006年 明治図書
- 9 出野宏「話し合い・討議」「対話」「対談」『国語教育指導用語辞典』1984年 教育出版

授業風景から

1 インナースピーチ



2 ペアートーク



Practice-based Report

Seminar on Debate and
Deliberation at a Professional School:

Educational Effectiveness and
the Practices of Inner Speech and Pair Talk

Hanada, Shuichi

This article describes some of the contents of a Seminar on Debate and Deliberation, taught in the 2006-07 academic year. It focuses on the sections on inner speech and pair talk. There were 11 students in the year-long course.

Inner speech is understood as speech toward oneself as opposed speech toward others. I translated it as dialogue within oneself, and treated it as one of the teaching methods of debate and deliberation. Pair talk is understood as discussion by two persons, dialogue, etc. I translated it as dialogue between two persons, and also treated it as one of the deliberation methods. Both inner speech and pair talk aim at deepening, expanding, and reforming one's and others' ideas and recognition through the reiteration of the two forms of dialogues about certain problems and topics.

Based on the analysis of students' lecture notes and presentation handouts, this article aims to investigate the educational effectiveness of the methods used in the course and to contribute to the development of practice-based research on debate education at professional schools of education.

Key words: switching position, logical thinking, deepening, expansion, and transformation of recognition, methods of expression
